徳島ペンクラブ通信 第196号

２０２３年（令和５年）10月15日

発行

徳島ペンクラブ

１９６７年（昭和４２年）創刊

第24回とくしま随筆大賞表彰式

9／17　於　徳島県立文学書道館

◆　とくしま随筆大賞

「夜はこれから」　松尾初夏　さん

◆　徳島新聞社賞

「旅立ちの旅立ちの旅立ち」　静　春樹　さん

第24回とくしま随筆大賞受賞者は次の通りです。

とくしま随筆大賞　「夜はこれから」　松尾　初夏

徳島新聞社賞　「旅立ちの旅立ちの旅立ち」　静　春樹

優秀賞　「孫からの恩返し」　田中　良子

「盗らば寂しかり」　森　繁生

「つないだ命」　藤居　光夫

「心の扉を開いて」　大本　泉

奨励賞　「小学五年生」　七色　ぴあの

審査員　依岡　隆児　徳島ペンクラブ会長

柏木　康浩　徳島新聞社生活文化部記者

丁山　俊彦　ＮＰＯ法人モラエス会理事長

竹内　菊世　飛行船主宰

第24回「とくしま随筆大賞」（徳島ペンクラブ、徳島新聞社）の表彰式が２０２３年９月17日、徳島市の県立文学書道館で行われました。受賞者のほか家族の方々の出席も多く、徳島ペンクラブの依岡隆児会長から各受賞者に、賞状と賞金が手渡されました。

依岡会長は「随筆、エッセーは両者を一言で区別するのは難しい。ただエッセーにはいろんなことを試すという意味がある。このことを今回痛感した」とあいさつされ、各受賞者に依岡会長、徳島新聞社の木下一夫編集局長から賞状が手渡されました。

大賞には徳島市国府町府中の松尾初夏さんの「夜はこれから」が選ばれました。徳島新聞生活文化部の柏木康浩氏からは、「松尾さんの作品は、カフカの『変身』を思い起こさせるような内容で、これからもカフカを超えるような作品を目指してほしい」と講評されました。松尾さんは、満面に笑みを浮かべながら「受賞は青天のへきれきで、これからもずっと楽しみながら書き続けていきたい」と謝辞を述べられました。

徳島新聞社賞は一昨年も同賞を受賞した吉野川市鴨島町鴨島の静春樹さんが、今年は「旅立ちの旅立ちの旅立ち」で受賞されました。幼い頃、一度だけ会ったおばあさんの思い出を綴られていて、言葉の持つ力を感じさせられました。

（次ページに続く）

ページ案内

1ページ　とくしま随筆大賞　3ページ　ひとりごと欄

2ページ　県民文化祭ほか　4ページ　リレーエッセイ

行事案内　ほんの散歩道

（前ページから続く）

本年の随筆大賞には、ここ6年では2番目に多い71点の応募があり、最高齢者は97歳の方でした。また優秀賞には徳島市、田中好子さんの「孫からの恩返し」、阿南市、森繁生さんの「盗らば寂しかりけり」小松島市、藤居光夫さんの「つないだ命」の3作品が、また奨励賞には大本泉さん（阿波市）の「心の扉を開いて」と、七色ぴあのさん（藍住町）の「小学五年生」がそれぞれ選ばれました。今後ともさらに研鑽を積まれて、来年もぜひご応募くださいますようお待ちしています。

❖ 県民文化祭　分野別フェスティバル

「徳島の未来の文芸を考える「第3回」
～生成的人工知能を利用した文筆活動について～

近年、IT技術が加速度的に発展し、それが文芸の世界にまで浸透しつつあります。ChatGPTを使っての文書作成はもちろん、俳句や短歌、詩、散文に至る文芸にまで波及するかの勢いです。そこでこの分野を研究なさっている方々の最新の状況、動向そして得失等についてディスカッションをお願いし、自己啓発の端緒として頂きたいと思います。ふるってご参加くださり、来る新時代への準備に資することができれば幸甚です。お待ちいたしております。

日時　2023年（令和5年）11月23日（勤労感謝の日）
　　午前10時00分～11時30分
ところ　徳島県立文学書道館　1F　ギャラリー
　　徳島市中前川町2丁目22－1
　　TEL　088－625－7485
主催　徳島ペンクラブ
入場無料
パネリスト　四国大学文学部教授　佐々木義登　氏
　　徳島経済研究所常務理事　里　正彦　氏
　　神山まるごと高等専門学校　関戸　大　氏
　　徳島大学大学院生　宮月　中　氏
司会　徳島ペンクラブ副会長　西池　冬扇　氏

❖ 新会員紹介

この度ご入会の会員の方を紹介します。大いにご活躍頂くとともに、出来得る限りの協力を致してゆきたいと思います。

新会員
松下　恵子　様　徳島市在住

❖ 秋の各種行事案内板

○ 野外読書会　秋のひと時を野外で読書を楽しみませんか。

読書ピクニック・植本祭・ブクブク交換会そして野外ビブリオバトルなどの楽しい行事を準備してお待ちいたしております。ふるってご参加ください。

対象　小学生～大学生。　県内で子供の読書活動に取り組まれている方。県内のまちライブラリー運営者。大学関係者。子ども食堂関係者。街づくり関係者。生涯学習関係者など。
日時　2023年10月28日、11月18日　PM1：00～PM4：00
会場　徳島大学　総合科学部1号館前園地（雨天時　徳島大学総合科学部室内）
　　〒770－8570　徳島市常三島町1丁目1番地
お問い合わせ先　徳島大学総合科学部　依岡　隆児
　　yorioka.ryuji@gmail.com

○ 特別展　天狗屋久吉と伝統を受け継ぐ人形師たち

日時　9月16日→11月23日
会場　徳島県立　阿波十郎兵衛屋敷
　　徳島市川内町宮島本浦184

○ 第35回むつみ祭

とき　10月29日（日）10時30分～15時
ところ　芝原公園（国府町芝原字神楽免）
出　演　サーティグラスボーイズ（ジャズ）桂七福、人形劇トロッコ（滋賀県）他
作品展示　むつみ会館・芝原児童館他　10月29日―11月2日正午

○ 人権文化を学ぼう―三番叟の巻

とき　10月30日（月）13時～14時30分
ところ　三好市立箸蔵小学校体育館
出　演　人形劇トロッコ（滋賀県）、阿波木偶箱まわし保存会

○ 芽吹け人権の種

とき　11月7日（火）13時45分～14時40分
ところ　三好市立箸蔵小学校体育館
出　演　人形劇団ぱせり（香川県）、阿波木偶箱まわし保存会

徳島への転校

北野ルル

中学二年となる春、徳島市に転居、転校した。大阪の学校では自分自身の自覚も持てないままに何故か「できる子」扱いされるのも負担で、少々小児ノイローゼ気味だった時。

新しい学校には、すでに「できる子」がいることにもホッとした。田圃だらけでのびのびとした徳島の空気は肩の力を抜けよ、とばかり。小学生の弟や障害をもった若者達と野球をしたり、日曜日はクラスの女子達と自転車を漕ぎ鳴門の岡崎海岸まで真っ黒になって出かけたり、ある日は沖洲の土手で「こんなに可愛いのに花言葉は復讐じょ」とアザミを見つけて友が言えば、急に大人に近づいた気がした。

思春期の手前、子供時代の終わりを、あの頃の徳島が大らかに受け止めてくれたのでした。

あるいはその庭はもう少し広いのかもしれない

宮月　中（星野　凜）

本を読み、詩を諳んじるのと同じだけ、YouTubeを見るのを楽しみにしている。特に好きなのがVtuberの界隈だ。そこでは様々なキャラクターに扮した「バーチャルユーチューバー」たちが、ゲームを実況したり、雑談をしたりする。歌を歌いもする。お気に入りの小説を紹介し、朗読をする人もいる。彼らの武器は派手な企画や胡散臭いご高説などではなく、人間の持つ生の言葉だ。だから彼らは表現に対してとても真摯に思える。そして、本を読まなくなって久しいと言われる若者が、言葉の面白さや会話の妙、日常生活における些細な気付きへのアクセスを失ったわけではないのだと思い至る。かつて文学が担っていた役割の一端を、今は動画が担っている。

残念なことに「最近の子は動画ばかり見て」という声を未だに聞く。そのたび、私達の好んできた表現の庭は、あるいは私達の知っているのより、もう少し広くて多彩なのかもしれないと考える。

山ガール

東條　孝

静寂な図書館の床で私は転んだ。『バターン』と鳴り響く。まわりの人たちが立ち上がると、次々と本が床に落ちて、パタパタと音をたてた。何もない床で、私はなぜ転んだか。原因は加齢によって足の筋肉が弱くなり、巨体を支えるのにバランスを崩したようだ。転んだ瞬間に手のひらで床を叩いて、柔道の受け身を使ったらしく、痛みはなかった。私は平身低頭し、四方に向かってお詫びした。これを聞いた妻はあきれ、私のXデーを案じる。今後は山登り、散策、水泳などの外出は夫婦セットを主張する。妻にはSさんを中心とした十余名の山ガールがいる。気持ちが若くて中年から八十余歳までの愉快な人たちで、私の参加を応諾した。男は一人、淑女たちは接続詞(ほなけんど、ほんでな)などをうまく使ってお喋り上手。次回は活火山の焼岳の頂に立つ。

太い指

辻本　一英

私は、識字学級や夜間学校を主宰している。学級生の多くは被差別部落の高齢女性である。共学者たちは、学級生に文字の読み書きを教えながら、一方では学級生が生き抜いてきた逞しい姿や優しさを学ぶ。教える側が、馴染みのある学校教育の手法に頼りすぎると、学級生は戸惑う。アカデミックな世界に押し込んでしまうと、学級生が生きる中で育んできた感性を矯正することになりかねない。それは、無文字文化を壊すことになりはしないかと、共学者間でよく議論した。その反省から、現在は「読む」「書く」だけでなく、「語り伝える」という柱を加えている。文字の読み書きだけでなく、自らの人生経験を振り返り「自分史ノート」に綴る作業にも挑戦している。

非識字者は、喋る力と人を見抜く力を磨きあげて生きてきた。人生経験に裏打ちされたその表現力の豊かさ強さには驚かされる。

「私は、七か月の早産だった。産婆さんはこの子は助からんと見捨てて帰った。近所の人は、奇跡的に助かった私に驚いたという。古い写真には、三つ下の弟より小さな六歳の私が映っている。私は、九歳まで学校に通った。三年生の途中に母親が寝込み、私が一人で看病したのよ。意地悪な婆さんが『まだ生きとったか。早う死ね』と母をなじるので、小さな体で婆さんを突き飛ばしたのよ。土間に落ちた婆さんは、『この子は鬼の子じゃ、恐ろしい』と近所にふれて歩いた。十五歳で大阪に子守奉公。その時は解放されたと嬉しかった、なんも辛うなかった。奉公先で、小学三年生の娘さんに勉強教えてと言われ、一瞬ためらいもしたが久しぶりの鉛筆の感触が嬉しくて引き受けた。娘さんに教える振りをしながら自分が勉強したのよ。二年間の年季が明けた後、大きな蒲鉾店の女中に雇われた。その家には大学生がいて、勉強を教えてもらった。初めてノートを買ったのはその時だった」。

現在八二歳の彼女は、十八歳の時に故郷にUターンした。徳島市内に新規オープンする大型スーパーの採用試験を受けて合格する。受験資格は高卒以上だったが、学歴を偽り店員になった。

「二十歳で結婚して子どもを産んだ。夫は放蕩の末に家を出て行った。食っていくために大きな男も音を上げるゴボウ掘りを始めたのよ。片親の子どもには不自由させたらいかんと頑張った。真夏の畑仕事やから、三年もしたら眉毛が分からんほど顔は真っ黒になってしもうた。ある時化粧したら『仮面かぶっとる』と笑われたんで、それ以来塗っとらん。一回塗って見せよか」と大きな口を開けて笑う。

彼女は、「この手には世話になった」と、握る太い指を撫でた。

ひとりごと

リレーエッセイ

天使が喇叭を

藍　人

五十五の手習いで始めたクラリネットだが、コロナ禍のためここ三年ほど中断している。そこで、マスクをしていても楽しめる楽器はないかと探していたら、キーボード講座生の募集案内を見つけた。ふと、大学卒業の謝恩会で、同じゼミのA君がホテル備付けのピアノで「なごり雪」の弾き語りをして女性陣の注目を集めていたのを想い出した。

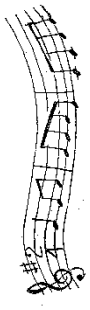
ああ、頭の上で天使が喇叭を吹いている。

幸い家には孫がポロンポロンと遊んでいたキーボードがある。押し入れの奥から引っ張り出してみると大人でも十分使用に耐えることが分かる。早速、応募したが、コロナ禍とあって一年目、二年目の講座は延期の憂き目に。漸く三年目、講師先生から受講の意思確認の連絡があり、満を持して昨年の五月から月二回の講座に通っている。

何せキーボードはまったくの初心者。四つあるクラスの内、私が所属したのは「ドリームクラス」。ほぼ初心者で占められているとのことだったが、聞くところによると大半は常連で二～五年通っているらしい。果たして講座について行くことができるのか。先生は「大丈夫、大丈夫。最初はみんな初心者。OK、OK」ってほんとかよ。

で、二年目の今年、先生の指導の賜か、私の涙ぐましい努力の成せる技か、何とか右手で簡単なメロディラインを弾くことができるようになった。が、左手を合わせようとすると、これ誰の指？　そこは♯、こっちは♭と冷汗三斗。初めて指が攣るという経験もした。♪音記号、ピアノコードなど覚えることも多い。脳の活性化に寄与しているのは間違いないだろう。たぶん、知らんけど。この分では、ひき語りなどは夢のまた夢だ。

しかし、私が所属する今年のクラスにはMさんという御年九十八歳の男性がいる。もう十年も、遠くK町から通っているから元気だ。また、最近、ギターも始めたらしい。本人は「ぼけ防止じゃ～」と笑うが、いやいやそれって凄いことですから。三十歳も年上のMさんに負けてられないなあ、と今日もキーボードを前に指の運動を始めている。



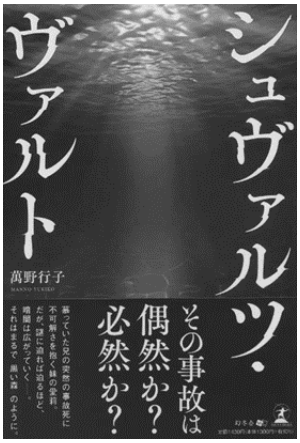
ほんの散歩道

本を出版された方は、ご連絡ください。当欄に掲載します。

『シュヴァルツ・ヴァルト』―小説

サスペンス風の創作。水泳選手としてトップアスリートの主人公が、F1レーサーであった兄のレース中の事故死の謎を追うというストーリー。著者の薬剤師としての確かな問題意識の上で書かれた「ドーピング」問題、事故の裏に隠された企業の問題等、豊富な知識に裏付けされ読者をグイグイと引っ張り込むエンターテイメント作品。

●四六判　134頁　1300円＋税●発行所幻冬舎メディアコンサルティング●著者　萬野行子



『日開谷御番所役人の妻』

徳島藩政時代、藩内全域に番所が設けられた。その地勢により各地各様な職責を課せられ、専任の役人が配置された。

本書はその番所にまつわる出来事やそれに携わる人々の生き様を、スリルやサスペンスを交えて著わした人情物語である。

●A5判　168頁　税込み1300円●出版者　製本屋JUN　購入はアマゾンで●著者　高畑純之介（高木　純）

あとがき

手を打てば「はい」と答える鳥逃げる魚は集まる猿沢の池（興福寺）

自分が書いた文や作品が、人目に触れてどのように読まれ見られそして評価されるか気にならない人はいない。表彰されるほどの評価を受ければ自信も湧くが、大抵は梨のつぶてである。それでも自分の想いは誰かに通じると信じて発表するしかない。黙っていては自分の感性を閉じ込めたまま一生を終わってしまう。自らを開けっぴろげにすると、必ず近づいてくれる人がいるものである。一緒にやって行こうと寄り添ってくれる。たとえ分野が異なり、考えや感性に違いがあっても、心を開けば相手も開く。厭なら逃げる。こうして賛同者が集り同人が繋がってゆくと思っている。

（粟）